

科目名称	社会科教育法Ⅲ	
	(担当教員名： 米田豊，王子明紀)	
課程	学部2・3年次	開講学期： 後期
授業形態	講義	授業規模： 31～80人
インタビュー対象教員名	米田豊，王子明紀 (実施日時： 7月8日(水) 17時30分～19時；実施場所：総合研究棟3階小会議室)	
インタビュー対象受講者名	生友駿 (実施日時： 7月21日(火) 16時30分～17時；実施場所：総合研究棟3階小会議室)	
選定理由	<p>教員は、本授業終了時に、社会科の指導案および黒板をしっかりと仕上げるようになることを意図して授業を行っている。両者とも授業の基本であるが、実習の場ではこれができない学生が多いという現実があるからである。学生は、実習へ出る前に本授業を受けることで、指導案を作ること、板書が難しいことを理解して実習に臨むことができるため、心の持ちようが全く違う。「この授業が、どのように指導案を作り、授業を作っていくかについて学ぶスタートとなった」と受講生はコメントしている。</p> <p>また、上記の授業の本筋だけにとどまらず、講義形式の中で、教育現場を肌で感じることでできる授業を心掛けており、それに成功している。担当教員が2名とも現場経験者であることや、授業に大学院生が同席している環境のもとで、受講生は、教育現場を具体的にイメージでき、知的刺激を得ているのである。その具体的内容として以下のことが挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大学院生と共に学ぶことができる 大学院生（現職を含む、当該年度は12名）が、協力者として、そして自身の学びを深める目的として本授業へ参加しており、世代を超えた交流の機会となっている。授業に大学院生が加わることで、学部生だけでは考える事なかったようなアドバイスを得ることができ、深いやりとりが生まれる。また、現職の大学院生と触れあうことで、現場の具体的なイメージを持つことができる授業である。 ● 現場で必要となる授業技術を学ぶことができる 教員は、社会科の枠を越えた現場での授業技術をたくさん伝えることを心掛けている。例えば、チョークの持ち方、黒板の消し方、使用するペンの色、学級作りや部活指導、生徒とのコミュニケーションの取り方、生徒が興味を持てるような発問の立て方など、伝承されていないが、実際は現場で必要となる授業技術がたくさんあるからである。 ● 雰囲気の良い 担当教員2名に深い信頼関係が築かれており、お互い冗談や本音を言い合える仲である。授業後は必ずお互いの授業内容について評価をし、次回への接続について入念な打合せを行う。このような雰囲気があるため、授業を重ねるごとに担当教員と受講生、受講生同士の関係が醸成されてゆき、学生が積極的に授業へ参画することと直結している。分からないことがあれば、授業中や授業後にかかわらず、何でも質問できる雰囲気で、笑いが多い授業である。 以上のことから、本授業をベストクラスの主旨にふさわしいものとする。 	